

## プロローグ 1 妹

自分が望まないのに、こんな力を産まれながらにして持っている、というのは、普通の人にはちょっと想像がつかないと思う。

わかりやすいように言えば、「ものなど見たくないのに、どうして目が見えているんだ」という事になるから。みんなにとってはうらやましいものかもしれない。

だけど、こんな力なんて、ボクはいらない。

人の考えた事が、勝手にボクの頭の中に入ってくる、こんな力なんて……

兄貴は、いつも普通の人と同じように学校にいつてるけど、どうしてそんなことが出来るのか、とてもじゃないけど信じられない。全然わからない。

また声が聞こえてきた。

『ドウシテアノ女、ヤラセテクレナインダヨ、ツキアツテモウ三年ダゾ、コレナラ、他ノ女ニノリカエタホウガイインジャナイノカ』

『ホントト、ドウシテ痴漢ナンテルノヨ。シツコイナア……アツ、バカ、ソシナトコサワンナヨ！』

うるさい！

ボクは人間なんだ。こんな怪物みたいな力なんて、絶対にいらぬ。

\*\*\*

「いつてきまあす」

下からは、兄貴のいつもの挨拶が聞こえる。

ボクは、いつも通りベッドの中。

兄貴は、いつも通り高校にいつて、ボクはいつもどおりお薬飲んでポーっとする。

もう、こんな生活なんてやだ。

毎朝そう思っても、いつもこんな生活を続けちゃう。とてもじゃないけど、ボクは兄貴みたいになんて、なれやしない。

机の上の目覚し時計は、兄貴と同じ高校に入学してからこの一年、鳴らした事がない。

ボクはいつもベッドの中。学校になんて通ってない。あと二年このままだったら、ボクは時動的に退学になるらしい。皆は、頭がいいのにもったいない。とか言ってる。勝手なもんだ。みんなは成績だけを見てそんなこといつてるけど、ボクがどうやってテストの答えを書いているか、みんな知らないだけだ。

でも、ボクはそれでもいい。  
学校で習う事なんて、もう何も無い。

先生の頭の中から、全部教えてもらったから。  
テストだって、ボクは問題を見なくても答えを書ける。  
だって答えは、教室の皆知ってるから。

どれもこれも、全部つまらないものばかり。決まった問題に決まった答え。教科書に書いてあることをずっと反復してるだけ。ボクは、それをなぞってるにすぎない。

皆はそれを知らないだけ。しってるのは、兄貴一人きり。きつとママだって知らないはずだ。大好きなパパだって、きつと知らない。

「美樹、お薬の時間よ」

ママが、下からボクに声をかけてくる。

ボクは、ゆっくりとベッドを降りて、パジャマのまま薬をもらいにいく。一日に数える事ができるくらいしか触らないボクの部屋のドアノブは、いつもボクに冷たい。触りなれていないから、少しよそよそしいのかもしれない。

ドアを開けて、階段を降りていく。

この階段を上り下りするの、一日に五回だけ。三回はご飯を食べへにいつて、薬をもらいにいくとき。一回はお風呂に入るとき。一回は、パパを迎えに降りるとき。

階段を降りていく。ぎい、ぎい、と軋む音も、ボクを嫌っているようだ。

ボクがこの力 普通、こういう力って超能力って言うみたい に気付いたのは、実はつい最近。っていったって、もう四年はたってる。

ボクがその……初潮を向えてからなんだ。

最初は、こんなに強い力じゃなかった。もつとずつと弱い力だった。

他人の感情 怒ったりとか笑ったりとか、そんなのがわかる程度だった。それぐらいだったところは、生活する分にはなにも困る事がなかった。

階段を降りきって、ボクは居間に向う。ここでは、ママがボクだけのために作ってくれた食事と薬をテーブルにおいてくれている。

ママやパパの 声 は聞こえないから、ボクは安心していられる。

「おはよ、美樹」

ママはいつも優しい。

ママは、台所の向こうから、ボクに挨拶してくれる。

「おはよう、ママ」

ボクは、べたり、と床に座ってソファをせもたれ代わりにすると、座卓の上に置かれていたボクだけの食事を食べ始めた。

居間は静かだ。

テレビがついてないからだ。

ボクが、画面に映ってる人の志向を読み取ってしまうから、ボクがしたにいる時は、わざと消している。

今みたいになつたのは、いつぐらいからなんだろう。

高校受験かな？ そのちよつと前ぐらいから、少しずつボクの力は強くなつていった。

そして、高校受験が終つてから、この力は衰えるどころか、さらに強くなつていった。

兄貴は、その前から自分の力を思い通りにしようと思つてたみたいだけど、ボクはそんなこと全然考えなかつた。いつか消えてなくなるつて、そう思つてた。

でも違つてた。

今じゃ、医者からもらつてる薬がなきゃ、多分一日で頭がパーになると思う。

全部嫌いだ。ボクをこんなにした力も、汚い事しか考えない汚い人たちも、気持ち悪いなにかも、全部嫌いだ。

こんなものばかりなら、いっその世なんて、なくなればいいのに。

パパとママと、兄貴の四人だけの世界になればいいのに。

そうすればきっと、ボクだつて普通に笑えると思うのに

## プロローグ 2 兄

俺には、妹の考えている事が手に取るようにわかる。

こんな力なんて要らない。なければいいのに……

日がな一日、そうして現実逃避をしているだけだ。俺みたいに、積極的に力を操ろうなんて意志は、あいつにはこれっぽつちもない。

俺は、登川有紀。

ガキのころからへんな力 世間的に言えば超能力みたいなものをもっていた。みたいなもの、とは正直この力が超能力とは少し異なるような気がしているからだ。

だから、他人の思考が声となつて聞こえるからテレパシーだ、とは思っていない。今でこそ、俺はこの不可思議な力を制御できているが、出来ずにしたその当初は、声を聞いている、というよりは、声を聞かされている、といったほうがあつていたからだ。

こうやって制御ができるようになるまでには、とてもじゃないが筆舌に尽くし難い、異常で気が狂いそうな経験もしてきたけど、それをいちいち説明するのは自慢するようではないのだから説明はしない。こういう経験談はえてして不幸自慢のきらいがあるからしたくないのだ。

ともかくも俺は、この力を制御する事ができたおかげで、妹みたいな無秩序な情報の流入なんていう、ぞつとするような経験はしませんでした。ここに至るまでには、毎晩

欲望を押さえつけるときのもどかしい思いと、絶ち切り難い誘惑　すなわち、超人願望をおさえるのにひどく苦勞したもののだけど、とにかくそのおかげで今は、勤の鋭い奴と級友からからかわれるにしろ、まともな生活を送れるようになってきた。

だからって、俺は力の制御ができず自分の殻の中に閉じこもって淀んでいる妹が悪いだなんて、これっぽっちも思わない。人間なんて所詮そんなもんだからだ。いちいち、目くじら立てるほどのことじゃない。自分にできたからといって、それを他人に求めるのは間違いだ。

おかしな力があつたところで、所詮普通の人間なんだからな。力だけが特別なだけで、それ以外は、ごく普通の人間なんだから……

\* \* \*

俺は、ため息をつきながら高校までの道のりを歩いていた。

自宅から高校まで、歩いて五百メートルと離れていないところに、俺の通っている高校があり、そのせいで自転車通学の許可範囲からは外れているため、いつもこうして徒歩で通っている。

初夏になる朝の陽射しは眩しく、今が梅雨のシーズンであることを忘れさせてくれる。

アスファルトは昨夜降り続いた雨によつて洗い流され、黒々と舗装されたばかりの頃の色を取り戻していた。目に映るものすべてが新鮮で、春の終りと共にやってきた夏の太陽の輝きを、色彩が我先にと喜んでいるかのようだ。

風が適度に吹いているおかげで、雨上がり後の蒸れた空気も吹き飛び、涼やかな風が心地よく頬をなで、幾分長めの俺の髪のをはためかせる。

このまま何もなければ、今日は本当に気持ちのいい朝だ。こんなにいい朝を、梅雨時期のこの季節に感じられる事は滅多にないだろう。

だけど、俺の頭の中には、妹の思考がなかに反響するように響いていた。

だれもいなくなればいいのに……

そんな都合のいい世界なんて、出来たとしても、どうせすぐに飽きてくるさ。そして、今度はどうして誰もいないの、と嘆くに決っている。結局、妹は辛い現実から目をそらしていただけなんだ。都合のいい現実を夢見て、なんでも人のせいにして。

結局望んだ世界を手に入れても、その世界の不満を見つけて嘆く。

あいつはそういう奴なんだ。

だから、俺はあいつに手を差し伸べたりなんてしない。

結局、俺たちのようなヘンな事が出来る人間なんて、自分で力をどうにか　制御か、なくすか　する以外にないんだからな。それに気付けないあいつは、結局自分の世界の

中で膝を抱えているのが一番なんだ。

そんな奴に手を差し伸べても、届くはずなんてない。あいつが　美樹が少しでも何とかしたいという意志を持つてくれたら、俺はどんな事でもしてやれるのに。

双子ではあっても自分ではない。同じ細胞を分け合った妹でも、自分じゃない。

その事実が、俺にいつも臍を噛む思いを体験させる。

そんな、いかんともし難い悔しさの中にいる俺の耳に、自転車をこぐ音と注意を促す鈴の音が飛び込んでくる。俺は、その音がした方向　つまり、後を振り返る。

「やっほ、登川」

片手を挙げて振りながら、俺と同じ高校に通う女の子が自転車に乗って近付いてくる。

中村梓

俺の彼女だ。間違で明るい性格で、ふとしたきっかけから俺の力を知られはしたが、それでも自分と付き合ってくれるという女の子だ。

普通ならばそれだけで文句のつけようがないところだが、外見としてはマイナス要因になるはずのソバカスや度のきつい眼鏡さえも、自分の長所にしてしまえるような容姿の持ち主となれば、もう望むべくもない贅沢の極み、というものだろう。もちろん、クラスの中で俺だけが、彼女の眼鏡の下に隠された素顔を知っている。

梓は、俺の右隣にくと自転車から降りて歩き始める。

「迎えに行くっていつてたのに、登川つてばすぐに一人でいつちゃうんだもん」

少しすねた風だが、梓が怒っていない事は力に頼らずとも我が掌の如くに理解できる。

「家族に知られたくないんだよ」

実際は妹に生の梓の心を触れられたくない、というのが本音だ。

俺を心の拠り所としている美樹のことだから、梓の俺に対する想いを感じたとき、きつとあいつなら感情の赴くままに力を使い、梓の心に深い傷を作ってしまう事が簡単に予想できるから。

あいつはいい意味でも悪い意味でも純粹で子供だから、自分さえよければ他人はどうなつてもかまわない、というきわめて幼児的、且つ独善的な思考の元、平気で人を傷つけてしまっただろう。

あいつはまだ精神年齢が幼いから、笑つて虫を殺すことができるんだ。頭でそれはいいけないことだと理解はしている。ただ、その一方で押さえきれない破壊衝動があり、その矛先を見つけたとき、その先にある対象をためらわず壊す。

子供特有の残虐性が悪いとは言わないが、それをためらわず人間に対して見せ付けることができる美樹には、少々嫌な部分を感じている。

「外で待つてるくらいいいでしょ？」

つと、ちょっと機嫌を損ねちゃったようだ。女心と秋の空というけど、売り言葉に買い

言葉で出てくる言葉だつてあるし、それに感情が引つ張られることだつてある。単純に女心だから変りやすい、というだけではないはずだ。相手の不用意な物言いが、心に変化をもたらずことだつてある。

「悪かつた。明日からは外で待つてるよ」

俺は、梓の頭を撫でて答えた。

本当は、家の近くなら美樹に気づかれる心配があるが、多少なら梓の心を美樹に読ませないよう、心理的ブロックをかける事もできるから、まあ、気にする必要はないだろう。

「ん」

こくり、と頷く。聞き分けが いいのも、彼女の魅力だ。

「登川、妹さんの様態、どうなの？」

自分の家族の事でもないのに、本気で俺の妹の事を心配してくれるのがわかる。俺の力が彼女に知られたとき、どうして自分の力があるのかという、俺もまだわからない事以外は、包み隠さずすべて彼女に話し、伝えていた。彼女自身、それを説明してもらうことを興味本位ではなく、より深く俺を知りたいがために望んでいたからだ。

だから、梓が俺の妹ことを知っているのは当然だけど、やはり妹に対する認識が甘いのは仕方ない事かもしれない。妹の心の内に潜む子供ならではの破壊衝動と残虐性は、きつと理解できていない事だろう。

「ん？ ああ、いつも通りだよ」

俺は、一言で答えた。そうとしが答えられない。ほかに言うべき言葉もないし、それを探るための労力を払う必要性も感じられない。梓は単純に、俺と二人だけにいるときは、押し黙つた時間というのが好きじゃないから、それをなくすために尋ねた一言なのだろう。それ以上の深い意味はないだろう。

対して俺は、黙つて過ごす二人だけの時間、というの嫌いじゃないので無理に喋る事もしないのだが、彼女にはそれが、「登川って、ボクと一緒にいても楽しくないのかな」と思うきっかけになっているらしい。そこまで気を使う必要なんてない、とは一応言っているのだが、そうはいかないのが人間というものだ。

高校生の俺がそんな風に人間を語れるほど、長く人間をやつちやいなんだけど。

「ま、いつかはなるようになるよ」

俺は、妹の話題をここで終わらせるために、さっぱりとした口調で言つて、

「そういえばさ、昨日のあれ、みた？」

と、話題を変えるための言葉を繋いだ。あれ、とは、俺と梓がお気に入りのテレビ番組の事だ。なんでも北海道ではかなり昔から放送されている番組で、ここ最近、数力所の県でその再放送版を本放送として流している。

「あれって……ああ、あれ？ 見た見た。おっかしかったよね」

梓はこの言葉を皮切りに、こころごとく笑いながら次々に言葉を紡ぎ出す。

いままで、『ひょっとしたら、昨日のテレビ、見てないのかな』とか、『いつもこの話題出してたら、登川も飽きるだろうな』といった考えが彼女の頭の中を占領していて、話したくても話せやしない状態が続いていたのだろう。

変に気を使わず、とは梓の友人の弁だが、俺はそうは思わない。彼女のそんな不器用な優しさにも似た感情が、俺には嬉しかった。俺に嫌われるかも、という前提があったにしても、俺のことをおもんばかって話題をのぼらさずにいたのがよくわかるからだ。

言葉は古いが、そんな梓がたまらなくいしかった。

父親になんてなっていないからわからないが、父性愛のようなものを沸き立たせる。

それが、俺にとつての梓であった。

だから、そんな目で見れば俺が彼女に抱いている心情は、恋よりは愛というものに近いのかもしれない。

「ほんと、おつかしいよねえ。だってラジオの放送中にラジオの出演者を拉致して、そのまま番組に出演させるんだもん。」アメフトには気をつける。キックオフは迫っている」なんて紙渡されても、絶対なんだかわかんないよね」

「そうだよなあ。あれ、普通じゃ絶対許されないよ。多分、あの番組の出演者だからあれですんでるんだって」

世間から見れば他愛のない会話だけど、俺にとつて自分の力のことなんてきにせずに歓談できる、このひとときの時間はたまらなく大切なものだった。

突然、はっとした梓は立ち止まる。

俺はなんのことかわからず、一緒に立ち止まる。

彼女は、まるでこれから世間様には顔向けできないことをするような面持ちで、あたりをきよるきよると見回した。頬にはやや朱がさし、照れが見え隠れしている。

あたりには、奇跡的にとでもいおうか、誰もいない

俺もはたと思いつく。そっぴや、朝の挨拶してなかったよな。

梓は、きよるきよる回りを気にしながら、素早く唇を重ねてきた。そして、

「おはよ」

と、少しばかり頬に朱をさし込みながら挨拶をした。

俺もキスをして、

「おはよ」

挨拶をかわす。

別段、背伸びしているつもりはない。俺も梓も、自然にキスをしたいからする。ただそれだけのことだ。

視線を梓から、周りの景色へと移す。

視界にふと入ってきた新緑の葉が、朝の陽射しに透けていたのを見たとき、俺はこの朝日がなんとなく晩春ではなく初夏の訪れであることを告げるものだ、という不可思議な認識を、奇妙な確信を持って感じていた。

\*\*\*

夢。

白昼夢。

もしくは幻覚……

俺が今日見たそれは、屋上での昼食の後、梓の膝枕のもと午睡をむさぼっていたときだった。断っておくと、別に昼休みを、いつも彼女の膝枕で過ごしているわけではない。たまたま今日は、陽気に誘われて昼寝してしまっただけのことだ。

さて、その幻覚じみた夢　もしくは夢に似た幻覚は、いつももの如く真つ暗で何も無い、ただ、不可解なうねりだけが存在する場所から始まった。そこは、深淵の暗闇でもなく、さりとて光りに満ち溢れているわけでもない。人間の目には、どうとも捕らえられないような、混乱しかないなにか、奇妙な場所としか言いようがなかった。時折、泡のような何かが生まれては、すでに産まれてから途方もない年月を経ている古びた泡の中から、古び

た泡になどまるで影響を与えずに、普通なら信じられないようなエネルギーを有した波が放たれ、それに触れた新しい泡は、はげようとした瞬間にぶるん、と震えてその形を取り戻し、急激に大きくなっていく。

そして、場面は移る。

洞窟の中にいる蛇の胴体に手足がつき、衣服を着た奇妙な生物が、なにかとでも反道徳的のしか思えない、異様な祭壇の前にして筆舌につくし難いかわい祭祀を執り行っているかと思えば、ずんぐりとした体躯と猫背、口に牙が生え揃った醜悪な半魚人が集う深海の異様な都市が目の前に広がり、その次の瞬間には虚ろな響きのフルートの音とくぐもった忌まわしいリズムで打ち鳴らされる太鼓のリズムに身をあわせ、何かの最下層ともいえるようなそこでくねりざわめく不可解な存在や、荒野を歩く、褐色の肌を持つ端正な顔つきの青年に対する激しい憎しみ、そして、絶えることなき飢え

その中には、いくつか妹の美樹が見た悪夢も混ざっているのだろうか。

ゆらゆらと漂うくらげのような不確かな意識の中、見たこともない土地、時間、場所、あるいは宇宙を見たとき、俺は決って自分の存在どころか、この世界の存在そのものが疑わしくなってくる。

もちろん、地べたを這う服を着た蛇人間や、猫背で狂暴そうな半魚人などいるはずないし、ましてそいつらが集う地か都市や海底都市があるなど、信じられるはずもない。そう



信じたいところなのだが、始末の悪いことにこの白昼夢じみた幻覚の原因は、俺のわけのわからない力によるところが大きいのだ。

「登川、大丈夫？」耳に、恋人の梓の声が入ってきた。「凄い汗でうなされてたよ。ゆすつても起きないし、どうしようかと思つてたの」

俺は、ゆっくりと重たい体を起こす。

「また、あの夢？」

「ああ、うん。そうだ」

妙に粘つく口を動かし、そう答えた。

「時間、どれくらいだ？」

「まだ昼休みが終わるまで二十分あるわ。登川、寝てからすぐにうなされ出したの」

「そっか」

まるで寝たような状態ではない　むしろ、寝る前よりもひどくなっている疲れに辟易しながら、妹の事を思い出していた。

以前、妹に尋ねたところ、同じ時間に自分も同じ夢を見ていた、ということだから、恐らく俺が見た夢は力によるところであるだろうし、その力によって得られた情報のほとんどが真実であることをわかつている俺は、この夢を見た直後は筆舌につくし難い徒労感に襲われる。

普通の人間なら、恐らくこの夢を見たとき、台所に向つて包丁を喉に突き刺してしまおうか、と考えることだろう。幸い俺は、自分の欲望をコントロールする術を持っているので、そうはならないが、それでも軽度の自殺欲求が体を突き動かしてしまう。

美樹は、ほとんどの時間をラリッって過ごしているから、この程度ではどうも思っていないらしいのだが、俺は生憎とその手の薬　ハルシオンに代表される、強烈な作用を持つ合法ドラッグ　を常用してないわけではないので、自殺に対する誘惑をたちきるのは並大抵の努力ではない。

こうして梓と話している間にも、屋上を取り囲んでいる金網を乗り越え、飛び降りてみたくなつてくる。空中に身を投げ出したときの浮遊感と共に訪れる一瞬の生の充実感と、その後すぐに訪れる死の実体験を求めて、体が動き出そうとする。

そういう俺を知っているからだろうか。

梓は、俺の傍に居るとき、いつも俺をそつと抱き締めて、呪文のような言葉でこう囁くのだ。

「大丈夫だからね、登川。私がそばにいるから、大丈夫」

幾分幼く見える梓も、こんなときはやたらと大人に見える。

ああ……

俺は言葉無く、彼女の優しさに埋もれていく。最初は、弱い自分を梓に見せるのが嫌で

必死に拒んでいたのだが、ある時期から俺は彼女の優しさを素直に享受していた。

たったこれだけで、軽度の自殺願望を解消してくれるのだから、人間の心というものも大した物だと思ふ。

もっとも、たったこの程度の慰撫で満足してしまう心の傷など大した事は無い、と表現する事も出来るのだが、以前、いたずら半分で俺が見たのと同じような幻覚を、力を使つてイジメの常習犯にぶつけてみたところ、突然泣き出して窓の外に飛び出そうとしたことがあったのだから、俺の心が弱いというわけでもないだろう。

「あまり梓に甘えてばかりもいられないよな」

ゆつくりと梓の抱擁から離れる。断ち切るにはもつたいない誘惑だけど、世間様には男を名乗らせてもらつてる以上、甘えてばかりもいられない。それに、いつ誰が屋上にくるか判らないからな。膝枕まではまあいいだろうが、男が女に抱き締められているなんてところは、とてもじゃないがみつともなくて他人様に見せられるものじゃあ、ない。やせ我慢、なんていわれても、それが俺っていうものだ。

「いつも、梓にはみつともないところばかり見せてるよね」

梓はにひひと笑つて、ぴん、と俺の鼻の頭を軽く指ではじき、

「そんな事気にするの、登川つぼくないよ」

家族以外には俺にしか見せないような、屈託のない笑みを浮べる。クラスでは、少しく

らいが真面目な生徒、という風評である。その評価が示す通り、彼女はおよそ大声で笑つたりとかはしない。古い言葉を使えば、淑女のような態度を取っているのだ。

「そうか？ いや、男としてちよつとみつともないかなつて、そう思つてさ」

梓とのデート中に一度、もつとひどい発作のような自殺衝動にかられたことがあり、彼女がそんな俺を見て何を思ったのか抱き締めて、落ちつくよう俺を慰めてくれたことがあった。

そのとき以来、梓は俺がこんな発作的衝動にかられると、ほとんどいつもこうしておかしくなった精神を元に戻してくれる。

愛しい精神安定剤

梓は笑つて自分のことをそう評した事があつたが、それを聞いたとき俺は、思わず怒鳴つてしまつたが、これはまた別の話になる。今の俺には梓の存在が彼女の言った通りのものになつてしまつていた。正直、彼女無しでは生きられない。

「二人だけのときは、そんな事考えないで欲しいな。私、登川に頼られるの、凄く嫌じゃないんだから」

おい、そりゃあ表現として少し違わないか？ 日本語は正しく使つて欲しいもんだよ、まつたく。などと、一言居士みたく注意しても仕方ない。俺はずつと立ち上がつて梓に右手を差し出した。

梓は、女の子らしい白くて細い繊細な手を俺の手に預けた。俺は、見た目からは想像できない軽さの梓を、ひよいと引つ張るようにして立たせると、床においてある二人の弁当箱を手にする。

「さて、そろそろ戻るうか。ちょっと、あつたしな」

場所が悪いわけではないが、今、あの幻覚をみたこの場所にはいたくない。居たたまれない。しばらく。一週間ぐらいは、ここにはよりつきたくない。どうしても、あれを連想してしまうからだ。

「うん」

### プロローグ 3 妹

兄貴、ボクが何も知らないって、そう思ってる。

ボクは自分のベッドの中で、兄貴が彼女の梓ちゃんと学校の屋上で一緒にいるのを感じていた。

一応女の子っぽいボクの部屋。壁紙は家族のみんなの部屋と同じだけど、机の上にはぬいぐるみが幾つか並んでいるし、小物も本棚なんかに並んでる。誰が見ても女の子っていう部屋なんだけど、並んでるぬいぐるみや小物は、どれも時代遅れのものばかりだった。ここしばらく、外に出た事なんてないから小物なんて買ってないし、特にほしいものだってない。テレビだって、近くの家のテレビを透視して見ていればいいだけだから、特別欲しいわけじゃない。テレビゲームだって興味ない。申し訳程度に、兄貴のおさがりでもらったCDデッキと何枚かのCDがあるけど、どれも聞く気がしない。

ボクは、そんな自分の部屋の中で、布団に包まって胎児のように丸くなり、兄貴と梓ちゃんが屋上から階下へ続く階段を降りて、教室に戻っていくところを見ていた。

御棄のお陰で、ボクは自分の超能力を完璧に使いこなせるんだ。  
だから、ボクは知ってるよ。

兄貴は、ボクが梓ちゃんの事、知らないって思ってるんだ。でもボクは、兄貴が梓ちゃんと付合ってる事ぐらい知っている。

兄貴、ボクは梓ちゃんなら兄貴とつきあわせてもいいと思ってるんだよ。だって、梓ちゃんは兄貴の事、ボクと同じくらい大切に思ってるから。でも、兄貴はそんなボクのことを無視して、梓ちゃんをボクから放そうとしているんだ。

兄貴は、口先だけはきれいごとばかり言って、結局ボクのことを信用していないんだ。ボクの中で、ボクを裏切った兄貴への怒りが膨れ上がっていく。

どんどん、どんどん、エアポンプで膨らまされていく風船みた大きくなくなっていく。そしていつのまにか、ボクは憎しみの色に染まっていた。

二人を破滅させてやるう。そう考えていた。

瞬間、ボクの頭の中に、いろんなイメージが広がった。

to be continued

2001/03/04

AM01:38UP!!

by:P.TAKASHIMA

## 後書き

今回は、かなり変則的に開始。最初は、『声』のエピソードストーリー。

これは、本来なら五話のエピソードとして付け足す予定だったものを、それなりに読める形に変更したものだ。

続く物語は、これから始まる小説のプロローグ。一応、二、三話で終わらせるつもりだが、うまくいくかどうかは判らない。例によって、予定は未定なのである。ストーリー展開は、いかようにも出来る形であるはずだからこそ、未定なのである。動弁して欲しいのである。

## 今回の小説は

ぼんずがお世話になっている竹岡さんという方から、新作でもいいからぼんずさんの書いたクトゥール小説を読みたい、という要望が寄せられたことから始まった（ファンレターは、なにものよりも物書きの執筆意欲をかきたてるものなのですよ）。

読者に動かされて書く、というのは今回が初めてなので、いささかこそばゆくもあり、不慣れなところが出てくるかもしれない。また、期待外れで終わるかもしれない。

ただ、書き始めたからには、偉鷹が最後まで書かないと許してくれないので、何があつ

ても最後まで書くと思う（死んだら偉鷹に憑依して書かせるから。約束するからって縁起でもないこと言うなって）。

で、なんだかんだって

今回もクトウルである。なんともはや、前回の後書きで書かん！ と断言したにもかかわらず、情けない話だ。舌の根も乾かぬうちに、とはこのことをいうのかもしれない。だがまあ、こうして新作を無事発表できたのだからよしとしよう。